
僕の知らない世界で.....

追われる少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の知らない世界で……

【Nコード】

N7617J

【作者名】

追われる少年

【あらすじ】

とあるゲームショップで手に入れたゲーム。

そのゲームは時間を超える力を持っていた。

そのゲームを使って未来に行ったり過去に行ったり。

次第に仲間も増える。

だけど遙か未来は絶望だった！

それに立ち向かう主人公と仲間の冒険ストーリー！。

未来は！

主人公の謎は！
伏線たくさんのストーリーです！

〈はじまり〉飛びます

これは僕の知らない世界で起こった物語。

僕はこれを『知らせ』と呼ぶ。

『知らせ』は知らない世界を略した意味と、危険を知らせているという2つの意味からこう呼ぶことにした。

僕が『知らせ』に行ったのは3か月前のことだった。

それは、とあるゲームショップで安売りされていた某格闘ゲームを買ったのが始まりだった。

持っているゲームを全部やりつくした僕はなんとなくゲームショップに立ち寄り、ワゴンセールで売られているゲームを購入した。

家に帰ると早速ゲーム機を用意してプレイした。

だけど、このゲームはパッケージとゲームディスクが違った。

これはクレームをつけれるのでは？と思った僕はすぐにゲームショップに電話した。

「すみません。先ほど買ったゲームなのですが、中身が違うゲームなんですけど」

この時電話に出たのがアルバイトの人だったらしく担当者に代わりますと言って電話を担当者に代わった。

すると若い男性（担当者）が申し訳なさそうに電話にでた。

「申し訳ありません。すぐに交換したいのですがそのゲームはもうこちらに在庫がなくて交換できないので、返金させていただきますので購入しましたゲームとレシートを持ってこちらにきていただけますか？」

僕はレシートなんて保管してるわけがなくそのことを担当者に言った。

「レシートがない場合はこちらでは返金・交換ができないのですが………」

僕はこの言葉に怒りを覚えすぐに電話を切った。

こんな理不尽なことがあつてたまるか！

とりあえず僕は間違つて入っていたゲームをプレイしてみた。

すると、ゲーム画面は現れずその代りに日付設定の画面がでてきた。

《飛びたい時間を選択してください》

「なんだこれ？もしかして未来にでもいけるのか？」

実際未来に行けるなんてこれっぽちも信じてなかったけど僕は1週間後を選択してみた。

すると画面が真っ暗になって電源が切れたのかと思つたらうつすらと文字が浮かんできた。

《飛びます》

この文字が浮かんできた瞬間ものすごい目眩がして視界が真っ暗になった。

僕が目を覚ましたのは自分のベッドの上。

僕の白い0円携帯で時間を確認してみると……………

「飛んでる……………飛んでるよ！」

そう。本当に未来に飛んでしまったのだ。

でもこれってどうやってもとの時間に戻るんだ？

とりあえず電源でも切ってみるか。

僕は電源ボタンに手をのばして電源を切った。

すると、またものすごい目眩がして目の前が真っ暗になった。

そしてまた僕はベッドの上で目を覚ます。

時間を確認してみると時間が……………戻ってる。

〈はじまり〉 飛びます（後書き）

この作品はストーリーとしては結構いい感じにできてると思います。でも作者にとって初めてのファンタジー作品なので過度の期待はしないですね！

まあ不定期更新ではありますが、時間の許す限り書き続けたいです。

〈登場〉泊まります

元の時間に戻ってきた僕はこのゲームのことをいろいろ調べてみた。まずこのゲームで時間を飛べるのは僕だけのようだ。

友達に協力してもらいゲームをプレイしてもらったが、友達は時間設定画面すらだせなかった。

そしてこのゲームの力で一番気なるのはこのゲーム力の限界である。過去にも行けるかどうか。行ける未来に限界はないのか？

僕は何回も飛んで調べた。結果は、過去にもいける。そして行ける未来の限界は1000年までのようだ。

だって選択できるのが100年後までだったからな。

僕はとりあえずこの日は寝た。

時間を飛ぶのは予想以上に疲れる。

ちなみに僕は一人暮らしだからこんな遅くまで起きていても誰も文句も言わない。

職業は自宅で株とかをやってそれなりの生活をしている。

もう失踪していなくなったオヤジが小さい頃に教えてくれた株の知

識が役に立つとは思ってもいなかった。
オヤジに感謝だな。

次の日に僕は1年後の未来に飛んだ。

1年後の世界で僕はいつもと同じ生活をしていた。

特に変わった様子もなくいつものベッドの上に寝転んでいた。

新聞を見てみてもたった1年では世界は何も変わっていないかった。
だって、たった1年だけ。大きく変わる方がおかしい。

何も変わらない1年後の世界に僕は少し失望した。

そして、元の時間にもどった。

「結局、世界なんて簡単に変わることもなんてないよな……」

僕が嘆息していると、呼び鈴がなった。

僕は急いで玄関に行きドアを開けた。

すると、そこには僕の幼なじみの神島春かみしまはるが笑顔で立っていた。

僕と春は小学校からの仲でいわゆる幼馴染ってやつだ。

春の家は神社で春はとても袴が似合う巫女さんだ。

僕と同じで春はもう社会人で家で巫女さんをやったりして家業を手
伝っている。

「キン君ちゃんにご飯たべてる？どうせちゃんとしたものたべてないんでしょ。私がつってあげるから待っててね」

そう言つて春は僕が待てと言つてるを無視せずか部屋に入ってきた。

ちなみにキン君っていうのは僕の名前。

小さい頃からキンって名前のせいで馬鹿にされてきたからこの名前は嫌いだ。

僕の本名は北川^{きたがわ}キン《きん》

この名前をつけた親を恨みたいね。

「キン君キン君呼ぶな！」

「だってキン君はキン君でしょ？」

「まあそうだけどバイ菌みたいだろその呼び方！」

僕が少し怒り気味に言つと春は涙目になってしょぼーんとしている。

「じゅめん……………」

なんだか僕が春をいじめてるみたいじゃないか。罪悪感に襲われた僕は少し優しい言葉をかける。

「別にお前のこと嫌いで怒つたつてわけじゃないぞ」

すると春は徐々に笑顔になって僕に抱きついてきた。

「私キン君のこと好き〜」

僕は慌てて抱きついてきた春をひきはがす。

「なんでそうなるんだよ〜」

なんでこうなるかって？

そりゃ、春が僕にゾッコンだからだよ。

今まで春に告白された回数、365回。

そして僕はその告白を全部断っている。

これは現在進行形である。

別に嫌いってわけじゃないし、女に興味がないわけでもない。

付き合うつて行為に興味がないだけなのだ。

とりあえず、僕たち二人はこんな仲を保ち続けている。

やっと春の抱きつきから解放された僕は、適当に座布団に座って春と距離をとった。

だってまた抱きつかれたらたまったもんじゃねえからな。

幼馴染の僕が言うのもなんだが、春はものすごく可愛い。

何回も告白されてるのをみたけど全部「好きな人がいます」と断っている。

成績優秀、スポーツ万能、料理はうまいし性格もいい。

なんで僕のが好きなのかわからないぐらいだ。

身長は高くないが、いわゆるロリ巨乳でものすごく僕好みだ。

おいそこ！今僕のこと変態とか思ったな？

非難する前に手を出していない僕を誉める！

今日も春が飯を作りに来てくれたみたいだけどいつも感謝している。

僕が春に頼りすぎているのは自分でも悪いと思うが、春の作る料理はどれもおいしくてついつい頼ってしまう。

「春抱きついてないで早く飯作ってくれよ」

普通ならこんな言い方されると少しは怒るけど春が怒ることはない。

「はいはい。ちょっと待ってねえ」

春はスキップしながら台所で鍋を作り始めた。

20分後

鍋を作り終えた春はこっちに鍋を持ってきて僕はお茶と箸を用意した。

こんなことをしていると、なんだか新婚の夫婦みたいだ。

「それじゃ食べようか」

「そうだな。いただきます」

その後に春もいただきますを言う。

僕達は15分ほどで鍋を食べ終えた。

僕はベッドに寝転がってゴロゴロしていると隙をみて春が僕のベットに入ってきた。

「わあっ！何してるんだよ」

「だってキン君暖かそうなんだもん」

布団の中で後ろから抱きついてくる春の胸が僕の背中にあたる。

こんな時に平常心を保てる紳士がいるなら弟子入りしたいね。

後ろから抱きついてきた春を僕は振りほどく。

春はベッドから落ちた。

「アイタタタッ！ひどいよお〜」

「ごめんごめん」

僕は両手を合わせて平謝りをする。

ベッドの下に転げ落ちた春が、ベッドの下に手をのばしてあのゲームを出してきた。

まずい！ばれちゃった。

僕は急いで春からゲームを奪い取る。

「そのゲームって私持ってたゲームだよ！一緒にやるよ」

まあパッケージは普通のゲームだけど中身すげーもんなんだよ。そんなツツコミを心の中で叫びつつ僕は春を説得する。

「このゲーム買ったけど壊れてたんだ」

「嘘だ！」

え〜ここでそのネタですか。

まあどうでもいいけど。

「ホントだって」

春はこつちをニヤニヤしながら見ている。

「本当は中身だけエッチなゲームなんじゃないの〜？」

「んなわけねえだろ」

「とりあえず飯も食ったんだし今日は帰れよ」

すると、春は頭にはてなマークを浮かべて顎に人差し指を当てて不思議そうにしている。

「もしかして聞いてないの？」

「なにが？」

「今日は私泊まるんだよ」

「え〜〜〜〜！！！！」

「お父さんが神社の行事で家にいないからキン君の家に泊まって来
いって」

元徳さんそれは困りますよお

いつも何もかもが突然で困る人だ。

かみしまげんとく
神島元徳

春の父親で、神島神社の一番えらい人だ。

この人には昔いろいろとお世話になったから頭があがらない。

この人の命令ってことは諦めろってことなんだ僕の中では。

すると春はいつの間にか着替えを持って、どこかに向かおうとして
いる。

「春どこに行くんだよ」

「お風呂だよお風呂 キン君も一緒に入る？」

僕は耳まで真っ赤にして「はいるか」と怒鳴った。

今夜はどうなることやら先が思いやられます。

〈登場〉泊まります（後書き）

どうも追われる少年です。

めっちゃまとまりの悪い文章になっています。

ヒロイン登場させたのですがものすごく作者好みのヒロインになりました。

とりあえず更新を続けることを目標にしていきます。

皆さんも評価とか、アドバイスお願いします。

間に合えばファンタジア大賞に応募したいので^^;

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7617j/>

僕の知らない世界で.....

2010年10月9日04時35分発行